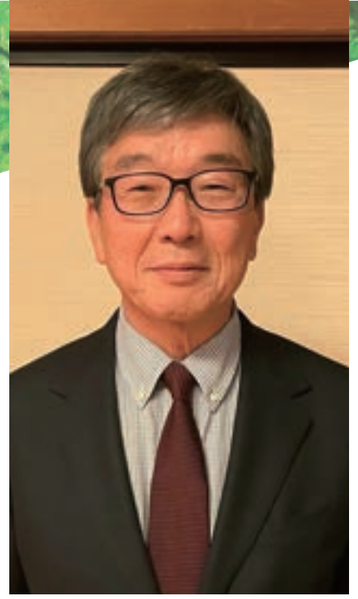
7

AKITA Biz Forest

あきたBizフォレスト TOPインタビュー

TOP INTERVIEW



株式会社エフエム秋田
代表取締役社長　船木 保美 氏

1980年秋田魁新報社入社。社会部長、政治経済部長、報道本部長などを務めて2011年に取締役総務局長。常務、専務を経て2020年に株式会社エフエム秋田代表取締役社長、現在に至る。

あきたBIZフォレストTOPインタビューは、秋田の起業家と企業環境を応援することを宣言いただいた100名以上の経営者の皆様を中心に、起業家に役立つ話題と起業家へのメッセージを対談形式でまとめたものです。

コロナ禍を経て再注目されているラジオの魅力

工藤　本日はよろしくお願いいたします。まずは船木さんの生い立ちからお聞かせ下さい。

船木　昭和32(1957)年に南秋田郡若美町(現:男鹿市)の八郎潟のそばで生まれ、実家は八郎潟で干拓前まで漁業を経営する網元でした。干拓後は漁場が減少したことや時代の変遷とともに、漁業の他に農業、あるいはドライブインや寿司店などの飲食店も営んでいました。

工藤　子どもの頃はどんな少年でしたか?

船木　とにかく毎日のように外で遊んでいました。稲刈り後の田んぼで野球をしたり、草むらに基地を作ったり、夏場はよく友達と八郎潟に泳ぎに行って、遊び終わった帰りには友達のお母さんから「あんぷら食ってけっ」とよく声をかけてもらいました。あんぷらとは男鹿の方言でじゃがいものことで、大きい鍋でたくさんのじゃがいもをちょうどいい塩加減に蒸したものです。今も懐かしい思い出の味ですね。地元若美の小中学校で過ごし、小学5年から秋田高校を卒業するまでは野球に熱中しました。

工藤　高校卒業後はどのような進路を?

船木　専修大学法学部に進学しました。大学時代に打ち込んだものと聞かれるとあまり思い出せませんが、当時付き合っていた女性が今の奥さんです。笑。卒業後は秋田に戻り、秋田魁新報社に入社しました。

工藤　大学時代は奥さんに熱中していたんですね!それはそれで素敵なことですね。新聞社を選んだ理由などはありましたか?

船木　漠然と社会に対する不満とか、どこか鬱屈した思いがありました。昔からジャーナリズムには関心があり、報道やマスコミ、政治関連の本はよく読んでいました。世の中の不正や問題を解決する糸口となりうるジャーナリズム、当時それが自分の最適解ではと考えました。魁新報社では約40年勤め、内おおよそ30年が記者、おおよそ10年は経営に携わりました。

工藤　魁新報社時代のことで記憶に残っていることなどはありますか?

船木　記者時代は、主に事件を扱う社会部記者を約10年、政治経済関連記者を約20年担当しました。記者の仕事は、社会の裏側を記事にしたり表面化させたりする仕事でもあります。そのためには、情報を伝えることに責任をもたなければならない。そうすれば内容を奥深くまで確かめることが必要不可欠となります。結果的に今目に見えていることの裏側を覗き込まなければなりません。おおよそ人間や社会に存在する全ての事柄には、必ず表があれば裏が存在するということを、身をもって知りました。世の中は表面だけを見ていてもなかなか真実にはたどり着けないものだなと。

工藤　深いですね。時には知りたくもない裏にも辿り着いてしまいそうですね。ところでFM秋田の社長に就任されたのは2020年6月、まさにコロナ禍中でした。社長として思う会社の課題などがありましたらお聞かせ下さい。

船木　まずは、ラジオの魅力を今一度社会に伝えることだと思っています。オールドメディアと言われるラジオですが、近年その在り方も少し変化しつつあります。コロナ禍の巣ごもり需要で、ラジオの聴取率も大幅に増加しました。コロナが収束してからもラジオ聴取率はさほど下がっていません。個人的にはラジオの人気はますます高まっていく望みもあると思っています。例えば、テレビは画面をずっと見ていなくてはなりませんが、ラジオは何かしながら聞くことができます。ラジオは何か別の作業をしながらでも情報を得ることができます。そういった側面では忙しい現代社会にもマッチしているのではないでしょうか。また、radikoなどの日本全国のラジオ放送やポッドキャストを楽しめるサービスも登場し、タイムシフト機能を使えばリアルタイム以外でも自分の好きなタイミングで聞くこともできるようになりました。他にもAudibleやSpotifyなど、映像メディアに対する音声メディアが今注目されています。

工藤　今どきの言葉で言えば「タイパ」に優れたツールの一つとも言えますね。

船木　そうですね。もう一つの課題としては、ラジオ局の経営を支えられる別事業の創造です。きっとこれは放送業界全体が抱える課題だとは思います。ぜひ起業家の皆さんにも知恵を貸しほしいくらいです。笑。ちなみにFM秋田では災害時に緊急情報の伝達を行う「緊急告知FMラジオ」の配信を行っています。緊急告知FMラジオは、事前に自治体から各家庭に配布設置したラジオへ、災害等の緊急信号を受信させ、スイッチのオンオフに関わらず、災害情報をリアルタイムでその地域に伝えられるという仕組みの災害対策ラジオです。県内で導入している自治体は美郷町、羽後町、小坂町で、来年度からは大館市も導入予定です。災害時に停電が起きた場合でも、ラジオは電池で聞くことができます。テレビやスマホよりも古い媒体ではありますが、そういう意味では、いざというときの情報源になります。ラジオの長所を活かしながら、いかに新しい事業に参入できるかを思案しています。このあたりから突破口が見いだせたら!と思っています。

工藤　なるほど。近年は災害も増加傾向で、その分、人々の防災意識も高まりつつあります。ラジオの強みを上手く掛け合わせた良いサービスが構築できたらいいですね。話は変わりますが、秋田における経済的ポテンシャルに感じている点があればお聞かせ下さい。

船木　観光分野と水田農業。私は特に水田を中心とした農業に将来性を強く感じています。今年は米が全国で一時的に品薄になったこともあり、我々の主食である米を見つめ直す機会にもなりました。秋田は米の国として、“あきたこまち”や“サキホコレ”などのブランドも確立できています。世界には米を主食とする国々は意外に多く、今も人口が増加し続けるインドやアフリカは米を食べる習慣があります。秋田がそのような国々と商売ができるようになれば、経済が豊かになる大きなきっかけになりえるのではないでしょうか?ただそのためには、大潟村のような大規模農業を県内各地で展開できるようにならなければならないこと、あとは耕作放棄地問題の解決も大切なファクターかと思います。

観光分野は何といってもインバウンドですよね。2024年上半期の東北６県の宿泊者ランキングでは秋田県が圧倒的最下位でしたね。苦笑。でも、言い換えれば、大いに伸びしろがあるという証なのではないでしょうか。

工藤　私は観光業にも携わっていますので強い危機感もあります。世の中の波に乗り遅れないように、まずはそれぞれが単体で頑張る。そのうえで官民が強く連携し他県に置いて行かれないように知恵をしぼり汗を流す。今が正念場!でも、ピンチはチャンス!ですね。

無心になれる庭いじりのひととき

ゴルフや温泉巡りも好きだという船木さん。そのほかにも、「庭いじり」が大好きだそう。土と触れ合う時間は無心になって作業をすることで心身をリフレッシュできるのだとか。休憩しながら3時間ほど熱中し作業することもあるそうで、達成感や充実感みたいなものも充足される、ついでに言えばその後に飲むビールもたまらなくおいしいのだとか。笑

本日は貴重なお時間とお話しを本当に有難う御財増(ございま)した。

インタビュー
合同会社ジェグルズ(共同事業体ジェイワン) アントレプレナーコンシェルジュ　工藤　実

ライター　株式会社せん　磯部春香
企　画　共同事業体ジェイワン(秋田市ビジネススタートアップ支援事業)